

**[成果情報名]** イチゴ‘きらび香’の年内収量を増加する超促成作型の開発

**[要約]** イチゴ‘きらび香’の超促成作型は、7月からの苗短日夜冷処理と定植直後からのクラウン冷却処理により、10月から頂花房を収穫し、第一次腋花房も12月から収穫できる。そのため、高単価の期待される年内収量が増加する。

**[キーワード]** イチゴ、高設栽培、超促成作型、夜冷短日処理、クラウン冷却

**[担当]** 静岡農林技研・野菜生産技術科

**[連絡先]** 電話 0538-36-1588、電子メール agriyasai@pref.shizuoka.lg.jp

**[区分]** 野菜・花き（野菜）

**[分類]** 技術・普及

---

**[背景・ねらい]**

イチゴの国内供給量は10月以前が少なく高単価である。しかし、10月から収穫する作型は、高温による小玉化や中休みにより年内収量が減少し収益性が高くないことが課題であった。そこで、苗短日夜冷処理とクラウン冷却処理により、10月から頂花房の収穫が始まるとともに、第一次腋花房の収穫開始を12月に早めることで年内収量が増加する‘きらび香’の超促成作型を開発した。

**[成果の内容・特徴]**

- 1 7月中旬から苗短日夜冷処理を、16時間暗黒条件及び目標気温15℃設定で、1ヶ月程度行い花芽分化させる(図1)。
- 2 苗定植直後の8月中旬からクラウン冷却処理を開始し、10月上中旬まで行う(図1)。クラウン冷却処理は、クラウン部に冷却チューブを接するように配置し、冷却チューブ内にチラーにて16℃程度に冷やした水を終日循環させて行う(図2)。
- 3 頂花房の収穫開始は10月中旬頃となる。クラウン冷却処理により若干初収日が遅くなるが、3果までの正常果が増加し(表1)、収穫初期の果実の1果重が増える傾向にある。
- 4 第一次腋花房の収穫開始は、クラウン冷却処理で10日程早まり12月中旬頃となる(表1)。
- 5 苗短日夜冷処理とクラウン冷却処理により、年内収量が増加し普通ポット作の1.5倍以上となる。また、5月末までの総収量でも普通ポット作より1割程多い(図3、4)。

**[成果の活用面・留意点]**

- 1 ‘きらび香’の高設養液栽培で行った試験結果である。
- 2 採苗時期が早いため、親株は3月中旬に定植し、早期に苗を確保できるよう準備する。
- 3 本試験では、冷却チューブに(株)阪中緑化資材のクラウン冷暖チューブを使用した。
- 4 クラウン冷却処理中は、葉の展開が若干遅くなるため、処理終了時期が遅くなりすぎないように注意する。第一次腋花房の花芽分化を、9月中下旬に検鏡にて確認するのが望ましい。検鏡による場合は、終了時期は分化確認の2週間後を目安とする。
- 5 クラウン冷却処理は、16℃程度の地下水が豊富にある地域では、地下水かけ流し等により行うことも可能である。
- 6 超促成栽培は寡日照期の着果負担が増えて株疲れなどの懸念があるため、炭酸ガス施用などの光合成促進対策を積極的に行う。

[具体的データ]

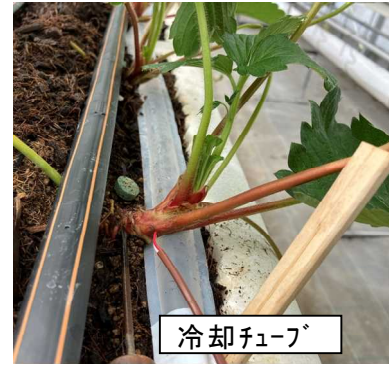
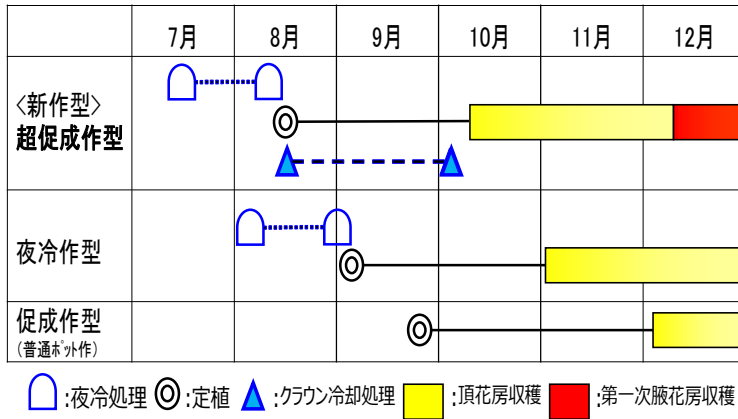


図1 開発した超促成型

図2 クワン冷却処理の様子

表1 頂花房および第一次腋花房の開花日および初収日（令和4年度作）

苗短日夜冷 処理時期	本圃クワン 冷却有無	(定植日)	頂花房			第一次腋花房		花房間 葉数 (頂花房—一次腋)
			開花日 (月/日)	初収日 (月/日)	1-3果 正常果率 <sup>1)</sup> (%)	開花日 (月/日)	初収日 (月/日)	
7/19 ~8/17	クワン冷却	8/17	9/25	10/20	97	11/9	12/13	4.4
	無処理		9/19	10/15	71	11/19	12/25	7.6
(参考) 普通ポット		9/27	11/6	12/9	—	12/1	1/16	2.7

1) 不受精果及び著しい奇形果以外の可販果の割合 調査：1区16株 3反復

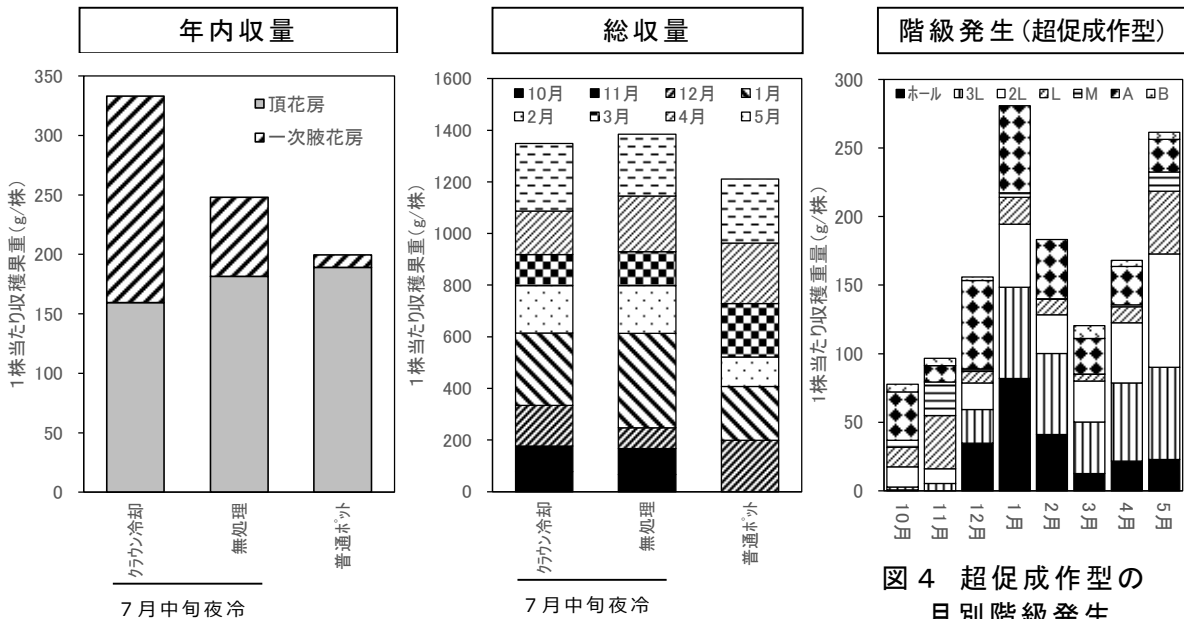


図3 年内及び総収量に及ぼす影響（令和4年度作）

図4 超促成型の  
月別階級発生  
(令和4年度作)

[その他]

研究課題名：首都圏へ供給拡大!! イチゴ生産を革新する「超促成」「超多収」「高収益」システムの開発

予算区分：新成長戦略研究

研究期間：2021~2023年度

研究担当者：望月達史、秋山光雅、河田智明、松田考平、山口源貴